

『看護の教育・実践にいかす リフレクション——豊かな看護を拓く鍵』 実践の学としての 礎を創る 1 冊

著：田村由美・池西悦子／定価：本体 2,800 円＋税
発行：南江堂／TEL：03-3811-7189



看護教育や臨床看護の現場で、「リフレクション」という言葉が交差するようになった。私たち教員は、リフレクションが有意義であることは知っているが、そもそもリフレクションとは一体何であるのか、という根源的な問いを抱きつつそれを実践していることが多い。本書は、これらの問いに答えてくれる一冊であり、リフレクションの理論編と実践編の構成は、概念的で具体性に富んだ内容になっている。とりわけ著者らの経験に基づく実践編は目を見張るものがあり、リフレクション学習の多様さ、奥深さを実感することで、リフレクションという教育方法のヒントが得られるに違いない。

■ 教育観の転換とリフレクション

学生に「教えたことが身につかない」「学習が積み重ならない」など、教えた内容が浸透しない問題の矛先は、学生へと向けられる。それは教員が、学習を知識の転写として認識し、それを保証することが教育ととらえているからである。知識の習得は、確かに必要である。しかし看護学は、人間関係を基盤としていることから、知識が他者とのかわりのなかに生きること動く知となり、看護として為されることが重要である。著者らはこの解明こそが、看護が実践の学としての礎を創るのであり、その方法がリフレクションであると説

いている。それは、看護者の感覚と知識との融合によって生み出される「感じること (feeling)」、すなわち他者との関係において派生する違和感や感情がきっかけとなる。教員は、学生に生じている感覚が実践に基づく学びの契機となるように、それを見逃すことなく支援することが求められている。

■ 看護実践の知の探求

これまでリフレクションは、主に諸外国の著作、思想をとおして紹介されてきた。本書は、そのなかでも D. ショーンの「行為についてのリフレクション “reflection-on-action”」を参照し、わが国の社会背景や看護学教育をふまえた独自のリフレクション論を展開している。そのため読者は、訳本のどこかフィットしない感覚を抱くことなく、著者らの言葉が身体に馴染むことだろう。同時に「読む」という実践を通して、自らの教育が鏡のように映し出され、まさにリフレクションを体験する機会となるだろう。

学生の学習課題は教員の教育課題であり、その振り返りなしに看護学教育の実践知を豊かにすることはできない。リフレクションとは、ただ振り返ることではなく、未来の看護学を志向した看護実践の知の探求なのだから。看護教育に携わる人に、是非とも手に取ってほしい書である。